

恋愛のアナ・ボル論争 (2)

山川菊栄と高群逸枝

秋 山 清

右のようにいったのは、高群が山川の恋愛観はそこに社会主義、共産主義というものを挿入しただけで実質は現代の男女の關係と変りないものといってるのだ、と見たからである。そんならば何も私たちの意識を「景品つき」だの「特価品」だのといって輕蔑するにも当らんじゃないか、と山川の意見を否定したからである。そこでその高群の恋愛観とはどうどういふものなのか、山川のこれにたいする反論がつづいて發表されたのである。

「ドグマから出た幽霊——高群逸枝氏新発見の『マルクス主義社会』について」。この標題を見ておもうことは、このとき逸早く問題が、いくらか「恋愛論」や男女關係の在り方の論評からずれていくらしいこと。アナ・ボル論争に付随しやすい逸脱が、ここでも顔を出している、といった感想である。山川における「粗雑な独断と空想」「一知半解のアナルコ・サンジカリズムと小ブルジョア自由主義」などというあげつらい方や『マルクス主義経済組織』——なんという奇抜な新発見でしょう！——なるものを、マルクス、社会、学説、と思ひ誤られる方もないと考えて、真実のマルクスの主張の一端

を御紹介しておきたく思うのです。個人の学説と社会の経済組織とが、実質的にも、觀念的にも、全然別個の存在である位のことは、今さらいうまでもありません。私共はマルクスの学説は知っていますが、『マルクス主義の社会』『マルクス主義経済組織』なるものは、寡聞にしていまだ耳にしたことがありません。これは高群氏の発見にかかる珍らしい経済組織の一つの型らしいのですが——（傍点筆者）といったいい気な学究的な冗舌は毎度のことながら、時をへだててそれを見るときは無駄にいらだたしいだけのものである。山川菊栄のかかる発言は、学問の問題としてあるいはその用語の問題として正しくあるにしても、やりとりされているテーマ「恋愛観」についての意見を述べることに何故に直進しないのか、といったくなる。高群のいつてる言葉の意味、趣旨が理解されるならばその上に立つて主題を追及すべきだと思われるのだが、だが山川にたいする高群の反論のなかの「資本主義は婦人を個人的に独立せしめた。然しその個人的独立というものは無産階級に依属した意味の上のものだ。美及び恋愛に質的変化を与えることはできなかった」という言

葉にたいする山川の批判は明快であった。

「私共の見るところでは、資本主義は一般的には婦人を賃銀労働者として、生産者として独立させたので、無産階級への依属者——即ち資本家として、利潤取得者として——独立させたのではありません。例外の場合は別として、一般的には、婦人の経済的独立は、彼女を無産者の列に加えることによって得られたので、労働によって独立を得た婦人は、無産階級に依属するどころか、彼女みずから無産階級そのものをなしたのであります。職業婦人といひ、女工といひ、資本家に搾取される賃銀奴隷の境遇にある者が、何で無産階級に依属する奇生者であるといひことができるでしょうか？」

この明快な意見に私が言葉を挟むとすれば「資本主義は婦人を賃労働者として独立させた」というところである。賃労働者（無産階級）として独立させた、ということが成立つか。だとすればそれは、何故か、何故そういい得るか、という問題である。私は高群逸枝の「資本主義は婦人を独立せしめた」という言葉はこういう意味において成立すると思う。それは家庭からの解放というその方向においてである。それが完全に、婦人の全人格的な独立、または解放、には程遠かったとしても、家からのある程度の離脱は、明治に女工が生まれ出たとき、事務室に女性が現われたときにその萌芽はあったと思う。個性に助けられつつそれらの中から、独立可能な女性が生まれ出た（条件つきながらの芸術家や職業婦人の進出）とすれば、これは封建制にたいして資本主義がもたらした新しい方向であった。そこで高群のいう「無産階級に依属した女性の個人的独立が、まだ恋愛に質的变化を与えなかった」ことを、資本主義社会の現実

相違ということにでなければならぬ。

たとえば「官僚」ということについての二人のいい分を聞いてみるに、山川はこういうのである。

「未来の制度の下に官僚がもつと甚だしくなるか、ということに対しては、否と答えねばならぬ。第一の理由として新しい社会には、誰にとつても、何らの種類の特権的な地位というものはあり得ない。殊に物質上の利益や権力という意味では、何らの特権的地位はない。なぜなら後者はまきり存しないし、物質上やその他の方面でも、新社会にはあらゆる品物が極めて豊富であることを考へたなら、すべての人々は労働の種類と性質との如何にかかわらず、十分にその必要を満足せしめることができるからである。

『それでは一部の労働者によって何ら特権的な地位というものは伴わぬにせよ、特殊な職業間になってゆくように、何らかの種類の恒久的グループが形づくられることはなからうか。これも全然ありそうにない。なぜなら未来の社会では、社会の全員は極めて高級な、一般的にしてかつ多方面な技術の教育と、どんな種類の教養をも得られ、したがって新しい制度の下では、狭隘な専門化がなく、労働者は時々異なった方面の仕事につき、また同時にいろいろの種類の労働に——たとえばそれが社会全体にとつても、各部にとつても有用な仕事でさえあれば、毎日、肉体労働と精神労働、工場労働と農場労働とに従事することができからである。』(フーバーリン監修『政治教育講座』)

このユートピア像はあまりに美しく、いい加えるべき何ものもないようである。それに対して高群が「マルクス主義の社会は資本主義と同じ企業原則——頭脳と筋肉労働の対立——が永久的らし

として考えることが必要となってくるのである。そこで山川が、とらえて高群への反論の手がかりとした「まじめな労働」の問題が問題となるのである。この「まじめな労働」というのは山川の始めの論文「景品つき特価品としての女」のなかで「恋愛を売らず、結婚によらずに女が生活し得るのは、まじめな労働によってのみ生活し得る時代」といったあの言葉に発している。

私は、山川が高群への反論において、学問の言葉——労働とか、利潤とか、有閑階級とか、頭脳労働、筋肉労働、管理統制とか——を多用し、その説明に当って高群の粗雑な表現を揶揄批判することに筆を費しているのは可成馬鹿げたことのように思う。彼女自身が「婦人が生活でも性のことにおいても、男の奴隷ならざるために」考察し論評することをまっしぐらにしたら良かったらうに、と惜しまれるのである。山川が、高群のマルクス主義の理解と批判を、たとえば現在社会の階級対立、頭脳労働者の社会的意味、未来社会へのイメージ、同じく未来国家における官僚等々についてマルクス主義知識人として、ことごとく論破しようとしていることは、論文の半分以上を占めるその量的な意気込みにも見てとれるところであるが、今それを回顧することは、あまり意味のあることではない。たしかに、その頃はまだクロボトキン、バクーニンさえほとんど読まずにアナキズムの立場に立っていたといわれる高群が、マルクス主義にたいしても世間的な常識並みの理解であったとしても、そのことがこの論争の中心問題とかかわるところは意外なほど僅かではないだろう。

ここでの問題の大切な一点は、山川における未来社会——ユートピアと、高群における未来社会のユートピアの、形態的、精神的な

い」といったことはマルクス学説とは正反対だ、と山川は指摘している。そしてフーバーリン説に依る山川のユートピアはここで次のような意味に再定義化されている。

「人各々の能力に従って寄与し必要に従って分配を受ける社会が、理想的なものであることはアナキストの主張している通りであります。ところで人間は百人が百人同じではない。能力に応じてする寄与も、必要に応じて受ける分配も、それぞれ異なる要求のままに質と量に異なって差支えない。——マルクスも人類社会が最高度に発達すればその状態が可能になると考えました。——けれども、それが極めて好ましい状態であるということは、それが資本主義の××と同時に、即時に実現のできる状態であるという結論に導くものではありません」

マルクス主義者が以上の論拠から「全民衆の利益のための生産と交換との新しい組織を建設しようとする、これが近代の社会主義運動の意義である」と主張することは許される自由であらう。しかしユートピアは描くが、現実（あるいはブルジョア支配の社会の破壊も含めて）とユートピアの社会の出現との間の無限の時間的距離のことは問題とされない。あるのは、現実だ、リアリズムだということになってしまつて「能力に応じて働き、必要によって取る」というユートピアはここでは霧散してしまふ。その霧散という無責任においてのみマルクスもエンゲルスもフーバーリンも山川菊栄も科学的に合理的に主張するかの如くではない。プロレタリア農民の現在を憎み、来るべき夢に賭ける憧れのユートピアは無限の彼方に飛び去ってしまうのである。だからこの論争の山川における第二番目の論文で、如何ほどその唯物史観の合理性を主張するとしても、現在

「最品つき特価品としての女」でしかない日本の女性の社会的な運命については、じつは何事も論じなかったことにしなければならない。階級制度が打破されて、平等の社会が出現するのでなければ、女性の運命だけが切りひらかれるという論理は有り得ないというのである。だからこの第二番目の論文「ドグマから出た幽霊」で山川は、特価品であってはない女性としての社会的運命については、語ってくれなかったのである。

コムニニズムを哲学的経済的にも、さらに生活的に、到達すべき社会の最高の状態（この論文のある個所で山川は以下のようにいう。——コムニニズムの最高の段階においては物資が無限に豊富潤沢であって、ひとしく分配されるのではなく、必要に応じて好きだけ消費でき、教育や道徳も最高度の発達を遂げている関係上、反社会的な行動はあり得ない）として描き、且つその出現を信じている山川が、ここに「国家」というものが、熟して落つるかの如くに消滅するであろうしあわせを盲信しているらしいことを、何と論ずる必要もないかのようなものである。高群にとっては、まず人間そのものが今日と明日の存在として、自分と共に向う三軒両隣のうるさくも、親しくもある日常の存在として、自分もまたまされもなくその一人として、自分の女性としての感情、利害、生身の欲望、または嫉妬、女の生きるに伴う条件の一つとしての愛情、失望、それが地球の重たさの如くに重大な問題なのである。山川のコムニニズムの信仰とはまるきり次元の異なるかと思える問題として現われている。

山川の意見では一切に矛盾なき論理が積み重ねられるが、かえってその故に説得力を感じさせることが弱い。この二つ目の論文の最

山川菊栄様

私は「婦人運動」一月号に「婦人運動の単一体系の新提唱」という一文を発表しました。私のこの一文について「婦人運動」の編集者からあなたに批評を依頼されたに対して、あなたは批評する興味がなくて冒頭した一文を発表されました。私はさらに私の意見を開陳して御返答を希望しました。いま一口に申せば「あなた方は前代の中性的女権論者たちと共に育児の社会化ということをおっしゃる。これは母性の意志に反している。母性は育児の社会化を欲しない。協同化を欲するのみだ。前は集権社会（及び分業社会）の産物で、後は自治社会（及び総合社会）にしか不可能だ」というにありました。本誌（注・「婦人公論」）に書いた「山川菊栄氏の恋愛観を難す」では、「あなたのおっしゃる純粋恋愛なる観念はすこぶる皮相的だ。それはあたかも人類のみを論じて経済事情を見落しているの類だ。たとえば、本来の婦人美は玩弄すること及びされることを恋愛と考えた有閑階級の恋愛観に順応して生れたもの、即ちレスターウオードの異性淘汰（有閑男性淘汰）の結果のもので、もはや女性はいかなる型の婦人美、いわゆる男性淘汰の結果の婦人美からは大きな方向転換を遂げるであろう。そのための生みの悩みとも云うべきものが、すでに女性の心の中には刻一刻と深まりつつある。そして女性がかような大きな転換を遂げた時にのみ恋愛は始めて純粋化されてくる。しかし大きな転換を遂げるための障害となるものは、家族制、私有財産制であると共に、集権制であり、分業制である。然るにあなたは単に家族制と私有財産制のみが純粋恋愛を妨げるとおっしゃる。それはあなたの純粋恋愛に対する概念が皮相的な無内容なもので、女性

後の山川の言葉は、この意味で、記憶に残るものである。

「高群氏がその超理論的な文章のなかに、取りとめもなく口走って居られる美とか恋愛とかについての漫言を、一々本気にとりあげて弁駁する要はなさそうに思います。ただ私有財産のもとにおいても、純粋な恋愛が絶対に存在しなかったわけではない。しかし、それは私有制度と、それにもとづく不自然、不平等な両性関係のためにしいたげられ、歪曲せられて、一般的な原則としては存在し得なかった。資本主義時代に至って、それにはたいする反抗は起ったが、なお一般的には、男女は自由な、純粋な恋愛をたのしむことはできない。それができるのは、未来の貧困もなく階級もない社会のみであるということを重ねて申し上げておけば足りると思います」

菊版の月刊雑誌上に十一頁にもわたった長い反論、本来女性の独立と恋愛の自由の問題についての所論であるべき山川菊栄の反論が、マルクス主義講座にそのほとんどを埋めつくして、本題については僅かに十行ほどで触れられて鼻をつけれられているの体たらく、ここにこそ山川の、否一九三〇年前後の日本における女性問題の軽視があったのではないだろうか。女性山川菊栄によって論ぜられながら、女性問題の現実について殆んど何も言われなかったこのような現象には、思い半ばにすぎることがある。

高群逸枝が「踏まれた犬が吠えたが——ふたたび山川菊栄氏に」をかいたのは、その翌月（一九二八・九）であった。やや長い「山川菊栄様」という書き出しのその冒頭のところを引用してみよう。

「切な虐げのうち、意欲の中から芽ぐんだ自覚ではなく、すこぶる浅薄な無責任な放言でしかない」という意見を述べたのであります。

いまや母性の自覚は本質的に刻一刻と深さを増してきている。母性は欲求をもつ。育児においては、母性は育児の家庭化も、育児の社会化も望まない。ただ育児の自由を望むのみである。

——今日の母性は、もはや前代の母性よりは一層明確な母性の宣言を社会に向って掲げねばならない切な欲求をもつに至っている。斯様な意味において、私はしばしば自ら指導者を以て任じ、共產主義社会こそあらゆる婦人の悩みを解決すると称している山川氏に対して非常な疑いをもったのである。既にそう自称されるからには、母性の一切の欲求を知悉し尽していられねばならぬ苦悩の中に、その発表される婦人観はいずれも浅薄、皮相、母性の心事を深く解している人でない。故にこそかのマルクス主義に何やら反感をも、疑惑をも感じないでいられるわけだろう。私はアナキストである前に、母性の自覚によってマルクス主義に心からなる反感を抱いている。また母性の自覚が同時にアナキズムに赴かしめたもので、この点あなたと出発点を異にしている。あなたははじめマルクス主義を奉じ、然る後、その思想にこじつけるための婦人論をなさる。あなたの婦人論のまったくこじつけであり、ごまかしである所以はここにある。（例を挙げようならば即座にいくらでも挙げましょう。）

私はこういう立場から、あなたに向って母性に関する各種の質問（注・「婦人運動」一九二八・一）をしたのであるが、あなたはそれについてたった一言ですらも返答をなさり得ない。そしていた

ずらに「妄想主義、小ブルジョア、夢遊病者」などと見苦しいのはせ気味な言葉が繰り返されるのみだ。あなたがもし言うほどの指導者なら、そういう抽象的な悪罵よりは問題の中心を掴んで論難なさるがよい。それが出来ないで、踏まれた犬が矢鱈と吠えつくように、やれ論言だ、やれ幽霊だ、何をシタバお騒がせさるというてやりたい程だ。

高群におけるこの発言は、自分をアナキストと規定したこと、また自分の所論が「育児の自由を望む母性の欲求」に立つことを押し出したことで、その後の仕事につながるものとして、高群逸枝を考える場合には重い意味をもつものである。

山川菊栄に向けて「あなたの『ドグマから出た幽霊』を拝見すると、中心点には一切ふれないで、僅かな言葉尻をとらえて、したり顔にそれが幽霊の正体であるようにいわれる」といった高群の不満は、すでに私が前に指摘したところである。確かに高群の、山川の見解にたいする、殊にマルクス主義にたいする発言には、マルクス主義の常識には何か欠けているかに見えるところがありしばしばある。だがその言葉尻をとらえて云々することは、ともすれば論争にはいつも起り勝ちのものであるが、それらの愚弄に近いやりとりは、それは研究にも論難にもならぬものでしかない。マルクス主義者として永年に亘って知られた山川菊栄にそのような、かえりみて他を言うといったような態度はこの際願ひ下げにしたいものだ。高群が「踏まれた犬が吠えたがる」で展開したアナキズム論は、この一連の論争としてはけっして本筋のものではなかった。結婚の自由、あるいは恋愛の自律、とでもいうべきテーマが掘り下げられずに、即

ち当時の知識人としてその共同の問題を考えようとする態度がまったく見られずに、社会観、世界観、あるいは革命思想、さらには各自の持つユートピアの相違などを述べることに全力が傾けられ、一九二八年即ち昭和三年の日本における、恋愛における現実的問題としては、いささかも噛み合った論争となつてはいなかったのである。遺憾ななしであるが、これはこの時以外に起こったいくつかのアナ・ボル論争の宿命的なスタイルと、また軌を一にしたのである。

このようななかで、山川の意見を要約してみると、革命成功後の社会でしか恋愛における女性の自由はないものとしており、宿命的な悲観説のようである。というのは、この時期わが国に革命の起こる見込みも革命する「実力」もなかったからである。またマルクス主義的立場からする山川の、極端なアナキズムへの、そして高群逸枝への、無智への軽蔑をこめたとき発言は、この論争をあまり裕りないものとしたようである。その豊富な、そして永年の知識活動の経験にもかかわらず、公式的な原理によつて相手をやっつける以外は、とかくテーマから外れ勝ちな、やや非現実的な論争の態度のごとくであった。一切がブルジョア社会を革命することの重要性に集中して、恋愛という各自にとって今日の生活の中の現実の問題として、論が少しも進められなかったのである。

これに対して高群は、八方破れともいふべき直情的な自我むき出しと批評されそうな態度でアナキズムを説いたのであった。

「——山川氏が私を一知半解のアナキストだとおっしゃる。さもアナキズムの世界にもケンケン服膺すべき絶対至高の偶像があるというように。ところが大違い、そんなものはない。アナキスト

には生かぢりなどというものはきいたことも見たこともない。どんな無学な者でも、最下層のもので、否、最下層のもので無学者こそあらゆる強権に苦しんでいるのだから真正の純正のアナキストになることができるのだ。全アナキストを古今に通じて結びつけているものは、山川氏が知ったか振りでいわれるような類でなく、強権を排し自治を求める、強権社会から自治社会への不断的欲求である」

「私はこの間、ある農民婦人の集まりを見た。彼女たちは無学者だった。けれど満腔の不平と叡知をもっていた。彼女たちは生れながらのアナキストだった。一切の政治家、支配者らは昔から農民を度しがたい民族と思っている。ブルジョア政治家はもとよりのこと、プロレタリア政治家もそうだ」

「農民はどんな場合にも自治的で、強権的でない。農民独自の個性は自治である。だから封建社会はさらなり、現社会でも何らかの形における自治を農民には許してある、が、徹底的でなく、つまり生かさぬように殺さぬように、その程度の自治を彼等農民に与える。もし眞の自治を与えたら農民は直ちに成長し、大きくなつて一切の強権的支配を駆逐し去るだろう」

こういつて可成具体的に、「自治」から進められひろげられてゆく彼女のアナキズム観は「工業と農業との村落における合体」というユートピアにまで到達する。この道順には主観的すぎる理解もあるが、その期待するところはうつくしい。科学の進歩に伴つての自由村落の出現を期待するそのアナキズム的ユートピアは、大機械化、大工業化の下に完全なコミュニズム社会の出現を期する山川マルキシズムと、その夢の究極はにどれほどの径庭があるのだろうか。

さてそこで、私がこの場で強調しておかねばならぬことがある。十巻の『高群逸枝全集』によつても、近ごろ彼女を読み、また語る人々においても、高群逸枝の「アナキズム」が忘れられているかに見えるということである。山川との論争でわがアナキズムを説きながら「今日を絶頂と見られる大工業の時代は、原始の状態に似通う簡単素朴な自由村落時代の出現こそ必然の過程といわねばならぬ

い。かような意味の科学の進歩と、それに伴う社会生活の単純化、これこそ母性の各種の欲求は合致するもので、社会は断じてマルクスの過程を過程せず、強権を排し自治を求める信念を不断に把持しつつ、自由連合の社会に向つて進展するものであることが知られるのである」と、はつきり、その到達を見据えている。ここにおいてそのアナキズムが女性の、また母性の、各種の要求を充たし得るところであると確信された上での、主張となつていことがわかる。母性の自由、育児の自由を求める者として、非強権なる自由連合の社会こそ、と思ひ込んだ理由がのみ込める。

その後の「女性の歴史」の研究に没頭することによつて、アナキズムによる活動から遠ざかった時期があったとしても、高群逸枝におけるアナキズム活動——その行動と発表とは打消しようもない彼女の歴史であり、また女性の社会的活動の記録である。

繰り返さうだが、この山川菊栄との論争においては、ついに論争としての結実がなかった。恋愛の自由とその女性の独立とが如何に可能かという大事な問題をとらえて、かかる二人の論客が出逢いながら、殆んど何もないかのように終つてしまったのは、イデオロギーの支配に日本のおおむねの知識人がとりこにされていた時代であったからではあるまいか。

じつは私は、高群逸枝の奔放な所論の中に、遠い未来や未来社会での自由の可能性如何についての推論などではなく、今日を如何に生きるべきかの問題が提出されているが、それがあらぬイデオロギー論争に肩代りされて逸脱の論争となつてしまったことが、遺憾でならない。われわれは理想を求め、自由と幸福を追いつづけるものにはちがいないが、いつか我が存在の跡方もなくなるような未来を論じつつ、その日における可能性を今日の現実につづして、ただ今吾はかく生きて然るべきか、悔なきか、恥なきか、を探索しつつある者なのである。今日の自由のために、その主旨を高群の所論に見出し得るとすれば、そのとき、ここに友あり、と膝を叩きたい思いでいっぱいなのである。私が高群逸枝を論争の名手だというのはいつも、相手の言い分に引きずられずに、自我を主張できるところを指している。山川菊栄との論争を見ても、対立点をはっきり持ち、政治的な思想発言にも及んで、最後に論争の起点と帰結を忘れないところがある。その終りに、次のようにつけ加えたことは採録に値することかと思われる。

「最後に申し添えておきたいことは、あなたは唯、逆上なさるだけで、婦人の立場からの私の質問(母性の自由及び恋愛の純粹化)について何一つ御返答なさり得ないということである。もしこれがあなたのお気にさわる僭越な言葉だと思召すならば、今からでもおそくはない。真正面からお答え下さい。顧みて他をおっしゃるのは、少しも構わないことではあるが、それは卑怯でないこともなく、また決して見よい図でもない。況んや臆病犬のような遠吠えにおいておや……」

いまここで、私が四十数年以前の『婦人公論』誌上のこの論争を

総括しようというのも異なるものだが、現在私における結論は次のごとくである。

「景品つき特価品としての女」における山川菊栄の発言は時事的評言として啓蒙的であり、恋愛と結婚の自由の問題にたいする頂門の一針であった。高群逸枝のこれに対する意見は、山川の見解がマルクス主義を立場として開陳されたに対して反マルクス主義に立つて、山川の「女が男に経済的に依拠する間は自由で純粹素朴な恋愛は不可能、だから、社会革命後にでなければ」というに對して、山川のいう社会革命後の自由にも疑問を呈しつつ、革命国家における官僚その他生産に携わらない階層の存在を問題とし、「女が恋愛を売らず、結婚によらずして生き得るのは、性の対象としてではなく労働によつて生きる時である」と言つたのである。ここだけ比較すれば、山川は現代の問題として論じ、高群は未来の男女の平等を恋愛と結婚の問題として論じたことになる。第二段階の論争は、各々の社会革命理念と、したがって「革命後の社会を予想しての社会革命論議」に終つたという感がつよく、その中間に挟まれて恋愛と結婚についての意見はほとんど展開されなかつたといつていい。もう一つつけ加えれば、社会的な問題として恋愛と結婚を論ずるとすれば、当然ここになければならぬ二つの事が大方欠落していた。一つは現実における今日唯いまの恋愛と結婚を自分は如何に生きるかということ。この観点はほとんど山川において殊に欠けて見えた。もう一つは「性」についての考察がこの論争に加味されなかつたことである。そこには昭和四十年代との時代のちがいが挙げられるだろうが、この観点をもう少し踏まえることが出来たら、論争に深味と現実味が増えられたであらう。

最初に紹介したように山川、高群の二人が互いに二つずつの論文を書いた後に、最後に審判員のように平林たい子の登場がある。今それを見るとき、それは如何にも蛇足の感がある。それは、平林が二人の論争のなから、たとえば私がここで考え感じたような仕方

に比べても何一つ取出すことをしてゐなかつたからである。それを、取出し得なかつたのだと私がいいたいくなるのは、平林が判然としたマルクス主義者の立場にのみ立つことで物をいい、まったくその問題を現在における欠落と欠陥の是正という生身の問題とすることが出来ず、「革命」への期待に解決を委託して事終れりとの態度だつたからである。多分、一方の論者高群逸枝の主観的な理想主義的な発言の中味を洞察しようとするところがまるでなかつたのは、マルクス主義の必然論の必然的な、宿命的な結論といえることも出来なかつた。平林が「ロマンチズムとリアリズム——山川菊栄高群逸枝両氏の論争の批判」と題してこの論争の第三回目として登場したとき、あるいはこの筆者を第三目目に登場させたとき、この論争の結末をどう落ちつかせるべきかについて編集者をも含めての方針が、当時のジャーナリズムの姿勢のままに、定められていたのかもしれない。いうまでもなく山川は、高群非の常識によつてである。しかしそこから「人間の生きる問題としての恋愛と結婚」という現代にそのままの問題としては何も論じられなかつたという結果が引き出されたのである。そこでその平林たい子の言葉の一つを拾ってみよう。

「婦人が恋愛を売らずにすむ時代は同時に彼女が結婚によらずして生活し得る時代——真面目な日常によつてのみ生活し得る時代でなければならぬ。」したがって商品としての恋愛でなく、真

に「対等な個人の純粹單純な恋愛」を求める者は「婦人が恋愛を売らずにすむ時代」を招来させるために「夫婦関係の本質、その経済的基礎に变革」を求めなければならぬ。以上が山川氏の「景品つき特価品としての女」の所論の骨子である。

「高群氏の『結婚を唯一の生活手段とする意識が排除されても純粹素朴な恋愛は浮び上らない』という結論には読者諸姉とともに私もまた賛同することが出来ない。現代の、恋愛関係から経済的打算がなくなれば、その恋愛がより單純になることは自明の理だから——」

「高群氏も山川氏も現在の婦人の自覚の程度には不満を持たれてゐる。しかしながら山川氏が今日の婦人の自覚の程度を一応認めて、その個人主義的自覚から、もう一步前進することを要求せられてゐるに反し、高群氏は婦人が封建的恋愛関係にも一度逆戻りすることを要求される。そこには到底融和することの出来ない、あらゆる階級、層、集団の異つた心理がちあつてゐる。」

高群逸枝の自由恋愛論が「封建的恋愛関係に逆もどり」を要求するものと何故に平林に読めたのであろうか。この判別はかんたんである。封建時代につづくブルジョア主義、つづいて社会主義の時代が必然的に来て、その下で女性たちは次第に覚醒し徐々に進歩するものだ、という楽天主義でもって平林がこの論争を読み、そのように歴史が流れる下に個人の自覚などは、先んじて在りようもないものだとしてスタチックに思い込んでゐるからである。

社会主義がまだ来ない日に婦人の自覚が在ることは何かに反するもののように受け取る者の言葉として、平林のこの判別是非現実であり、それでいながら夢とロマンがない。(一九七二、二二、二八)